3-2 一般患者の代替療法に関する意識調査

○植村英俊[1]、渡邊聡子[1]小笹晃太郎[2]、今西二郎[1]
[1]京都府立医大微生物、[2]老化研

[目的]一般医院及び漢方専門医院に受診している一般患者の代替療法の実施状況、情報入手源及び有効性を調査し、その特性を明らかにすることを目的とした。
[方法]一般医院及び漢方専門医院を受診した20才以上の患者を対象に、代替療法の実施状況、代替療法を知った手段及びその効果に関する調査票を受付時に配布し、記入後帰院時に回収した。
[成績]調査票の回収率は97%(590名/609名)であった。代替療法を行っていると回答したものは65%(362/554)で、このうち、漢方が72%と多く、健康食品：45%、鍼：33%、あんま・マッサージ・指圧：32%、灸：28%、カイロプラクティック・整体療法：16%、温泉療法：13%、ヨガ：10%、気功：9%、催眠療法：5％、タラソセラピー・海洋療法：3%、その他：6％であった。代替療法を知った手段として友人・知人が30%と多く、雑誌・新聞・テレビ等：25%、親・兄弟：16%、医院・病院：14%、薬局・薬店：11%の順であった。効果については、非常に効果があると思う：12%、かなり効果があると思う：32%、まあまあ効果があると思う：28%、少しは効果があると思う：16%、効果がないと思う：1%、わからない：11%であった。
[結論]回答を得た患者の65%が何らかの代替療法を行っており、このうち、72%の患者が漢方を、次いで45%が健康食品を使用していた。また、漢方と健康食品以外の代替療法は代替療法間の併用が多かった。情報入手源として口コミとマスコミによるものに大別され、漢方は口コミが多く、健康食品はマスコミが多かった。有効性については、漢方は60%の患者が非常に効果がある・かなり効果があると回答した。一方、健康食品は69%の患者がまあまあの効果である・効果がないと回答した。このように漢方と健康食品はよく使用されているが、その特性は異なる代替療法と認識されていることが推測された。